

中国の観光動向に関する研究

—都市住民の生活・余暇動向—

近年の経済発展と生活水準の向上を背景として、中国では国内旅行が急速に普及し、それに伴って国内の観光地やレジャー施設のインフラ整備も急速に進展している。また海外旅行市場もようやく揺籃期から成長期に移行し、近い将来アウトバウンド大国となる中国発の旅行市場動向に日本を含め世界中の注目が集まっている。今後我が国及び世界の観光動向を考察する上で無視できない、これら中国の観光市場動向及び観光開発事情を把握することを目的に、中国の現地情報の収集整理、及び中国国内での市場調査の実施等を行った。なお、初年度研究テーマとして中国主要都市（北京市、上海市、広州市の3都市）における都市住民の生活・余暇の動向について実態把握の研究を行った。

なお本研究は立教大学観光学部・溝尾研究室の協力により共同研究として取り組まれた。

岩佐吉郎 巻山隆

（共同研究者）立教大学観光学部 溝尾良隆 杜国慶

目次

非公開

本編『中国の観光動向に関する研究』

—都市住民の生活・余暇動向—

第1章 都市住民富裕層の現状

1. 基本属性
2. 生活水準への満足度
3. 利用する生活関連サービスの現状と希望

第2章 旅行参加状況

1. 1年間の国内旅行参加経験
2. 1年間の海外旅行参加経験

第3章 旅行先

1. 国内旅行先
2. 海外旅行先

第4章 旅行情報の入手方法

1. 調査の概要

調査対象者

北京・上海・広州在住の消費リーダーである上位約20%の富裕層

(定義) 16～54歳で大卒以上の個人、または16～54歳で世帯月収4,000元以上の個人、または16～54歳で個人月収2,000元以上の個人

調査地域

北京市区部(市内4区、近郊6区)

上海市区部(市内5区、近郊7区)

広州市区部(市内4区、近郊4区)

サンプリング

都市毎に国家統計局の名簿からランダムに居民委員会を50抽出、各居民委員会から100世帯を抽出。各世帯を電話スクリーニングにより、調査対象該当者を抽出(同一世帯からは一人のみ)、訪問・面接調査実施(50居民委員会×10世帯=各都市約500サンプル)。

実施機関

中国社会科学院世論調査センター(中国世研中興市場調査有限公司)

2. 結果の概要

(2) 結果の概要

本調査では、調査対象を富裕層として、学歴や個人月収・世帯月収で絞り込みをした一方で、年齢層や職業では特定の層への偏りを避け、均等な分布を示しており、学歴の点で都市別にやや偏りが見られるものの(北京では大卒が6割、広州では6割近くが高卒)、ほぼ所期の狙い通り各都市の上位階層を均質に獲得することができた(図1)。

図1 基本属性 / 世帯月収別分布

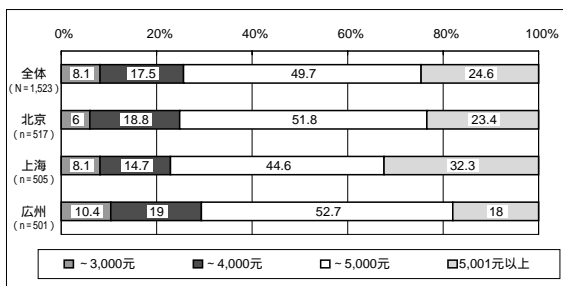


図2 衣食住や耐久財などの生活水準に満足しているか?

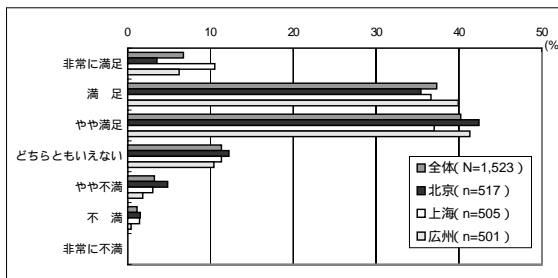
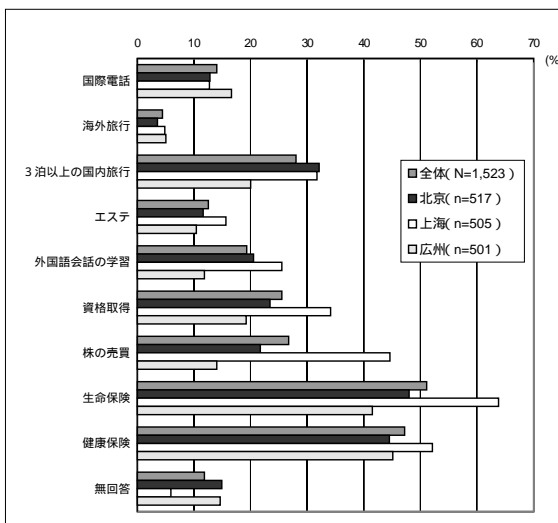


図3 現在利用しているサービス(複数回答)



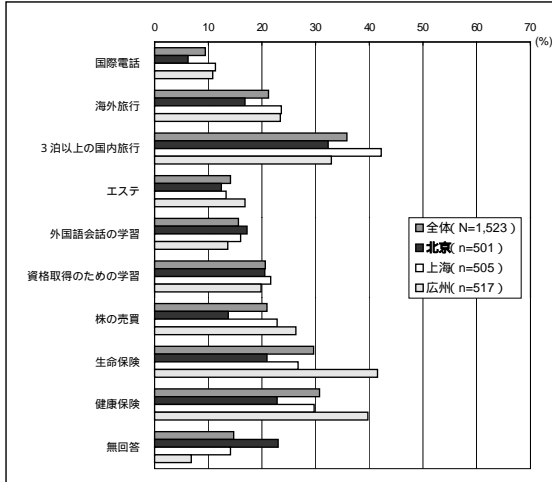
すでに大都市では個人事業主や外資系企業従業員など、一部では年収100万円を超える層が数100万単位で形成されていると聞かすが、ここで示された世帯月収3,000元～5,000元(世帯年収換算で5万円～8万円)クラスの層でも、生活実態として基本的な衣食住や消費財には充分満足し、増大する可処分所得を株や保険などの金融商品や教育投資、さらに旅行やレジャーに振り向ける余裕ができてきているさまが観察できる(図2、3)。

この中で、「3泊以上の国内旅行」はすでに3割前後の人が経験し、またこれから利用したいサービスとして「国内旅行」「海外旅行」が金融商品と並んで高い支持を得ていることから、旅行が消費トレンドの先端のひとつであり、この傾向が拡大する中国の旅行市場を支えていることが示されている(図4)。

さて実際の旅行参加状況はどのようになっているのだろうか。

中国国家旅遊局発表の00年旅遊統計によると、中国の国内旅行者数は7.4億人(総人口12.65億の

図4 これから利用したいサービス（複数回答）



58%)、海外旅行者数は1,065万人(同0.84%)であった。

一方、本調査の結果は、3都市合計でこの1年に1回以上の国内旅行経験者が41.6%、海外旅行が5%となった。全中国を対象とした統計である前者と比較すると、国内旅行参加率が思ったほどではなく、一方で海外旅行参加率は、当然のごとく全国平均より1桁高い。ただ旅遊統計と本調査いずれも国内旅行について日帰り・宿泊の別など明確な定義付けがなく、正確な対比となっていない。また海外旅行については、旅遊統計のそれが出国者数全体を示すのに対し、本調査では「自費参加による」と定義付け、より観光目的に限定したものであること

図5 この1年間の国内旅行経験

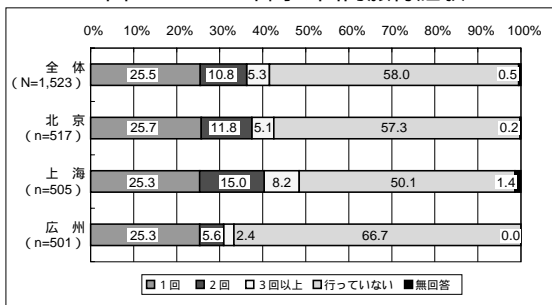


図6 国内旅行経験（全体）と世帯月収のクロス分析

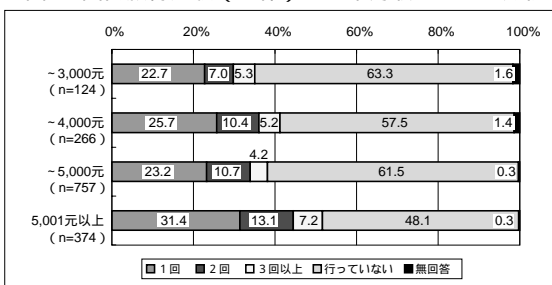


図7 この1年間の海外旅行経験

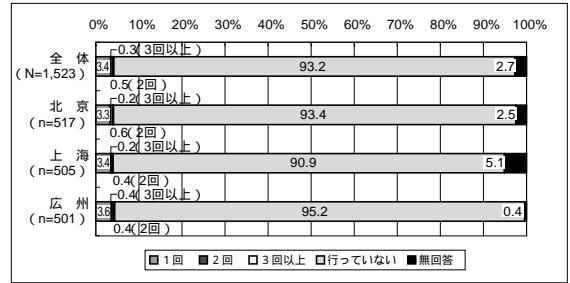
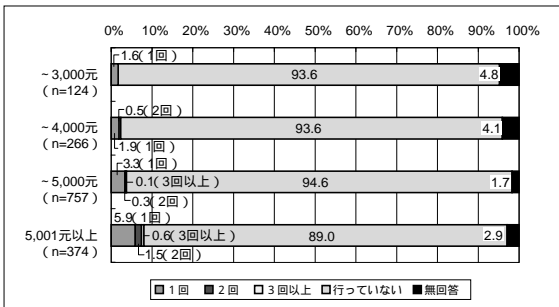


図8 海外旅行経験（全体）と世帯月収のクロス分析

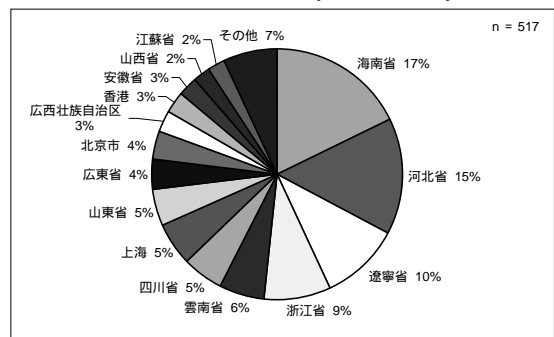


を特記したい。

国内旅行経験者率の3都市比較(図5)では相対的にみて上海がやや高く、広州がやや低いが、上海周辺は観光資源に恵まれ国内旅行先に不便しない点、広州は観光資源でやや劣るほか、越境旅行である香港・澳門が旅行先としてたいへん人気がある点等が付記できよう。

国内旅行の目的地は記述式としたため、非常に幅広い回答が寄せられたが、省別に整理をして3都市それぞれの旅行先の傾向を把握することができた。まず北京からは、南国の海浜リゾートとして観光開発の進む海南省がトップ、次いで、避暑地で有名な北戴河のある河北省、「北方香港」と称される大連を擁する遼寧省と続く(図9・1)。次いで上海からは隣接する浙江省が3割を超え、江蘇省、安徽省と合わせた3省で5割を占める(図9・2)。具体的地

図9-1 国内旅行先（1.北京市）



名では浙江省の杭州や紹興、江蘇省の無錫、安徽省の黄山が数多く挙げられ、国家級自然保護区や国家級観光リゾートの豊富な点が上海近隣の強みと理解される。広州からは、広東省内が4割を占めるが、特定の旅行先に集中しておらず広く分散している。次いで広東省に隣接する海南省が14%で、首都北京市が12%でこれに続く(図9・3)。また隣接の広西壮族自治区に属する桂林は個別の観光地としてはかなりの集中を示している。概して広州からの国内旅行先は他の2都市と比べそれほど多方面に渡っておらず、国内よりもむしろ海外に視野が広がっているのではと思われる。なお本調査で海外旅行先の選択肢に香港・澳門を設けなかったことから、これらの旅行先へのボリュームを把握できず、国内旅行・海外旅行の相対的な関係を掴み損なったことは反省したい。

図9-2 国内旅行先(2.上海市)

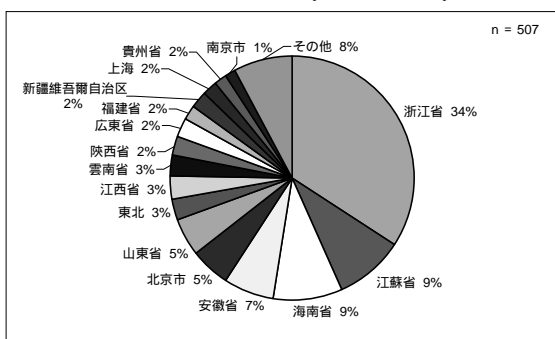
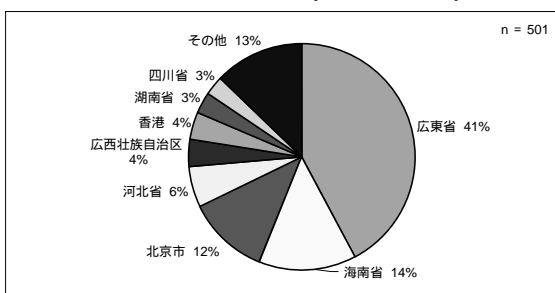


図9-3 国内旅行先(3.広州市)

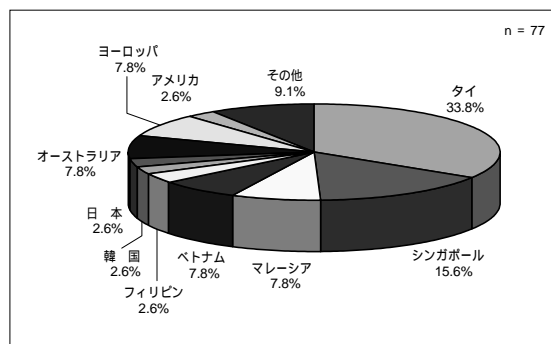


海外旅行先については、本調査での海外旅行経験者が5%、わずか77票であり、このデータをもとに一般的傾向を論じることはできないが、「自費参加の」と断っていることから、海外観光旅行の傾向を示すもの(図10)として、旅遊統計などと対比することはできよう。

例えば、00年の旅遊統計では、訪日旅行者が595,660人(全出国者の5.6%、香港・澳門以外への

渡航者数486万人中の比率で12.2%)であるのに対して、訪タイ旅行者は707,456人(同6.6%、14.5%)と近い規模であるが、本調査では海外旅行先のトップがタイで33.8%を占め、シンガポール、マレーシア、ベトナム、フィリピンを合わせると2/3に及ぶ。一方の日本旅行者はわずか2名で、タイとの差は歴然としている。母数が小さいため正確さを欠くとはいえ、旅遊統計とは異なる自費参加の海外観光旅行のマーケットの特徴が本調査の結果では割によく示されたのではなかろうか。もっとも日本側の統計ではこの調査時点(02年6月)ですでに中国からの訪日観光客が10万人を超えており(02年実績)、訪日観光旅行について本調査をもとに論じることは適当ではない。

図10 海外旅行先



なお、本調査では「旅行・ホテル利用時」の情報入手経路についても複数選択肢で尋ねており、「口コミ」が4割超でダントツのトップであったことが興味深い(図11)。今後訪日観光旅行のマーケティングに際して有効に役立てたいものである。

図11 旅行・ホテル利用時の情報入手源は?(複数回答)

